『國民新報』1939年9月17日

[主張]　職場と功名心[[1]](#footnote-1)　―青年學生への警告―

　のはをにることだ。のにすることだ。もとはそのにでることちそののになることである。にける、にける、にける、にける、は、、、、あらゆるにけるになることが、ちをてることなのである。けけのとふものはあるものでもなければ、よしんばあつてもきするものではない。てとふものは、一ツのにうてをぎ、することによつてのみせられるものであつて、に決してなどあるものではない。

　よりよきをりくものになはないものだ。一ツのにのかぬものにくをむことはない。へられたるになこそもしいであつて、はずすることであらう。とのあるはなるをへられてもしくやつてのけて、してをはない。のにをふやうなものははそのにさへしないやくざだ。してそれのにおいておやである。からてにつまらなく、になりさうなをば、ととをてくこそしくましいの一である。

　ととはである。のなるであればあるもである。であるからのをめるのはである。はいにるべきだ。かとふにはの々のので、もなもので、のをへるのに、るにつでもあるからである。むべきはつたのみである。

　は二ツのつたへによつて、づをしいてはをする。一ツはいきなりいなるもの、きものをのみてさきもの、きものをむことであり、一ツは一、々、々々としてがにてがをきげようとはせずして、のをふことである。をばくとか、にるとか、とか、、などのあらゆるはこゝからずるのである。

1. 新聞では「職場と巧妙心」と誤植されていたが、単行本『同胞に寄す』で修正されている。本文ではすべて「功名心」になっている。 [↑](#footnote-ref-1)